

青年期の自立にかかわる諸問題(2)

—ピーター・パン・シンドロームと男性の自立—

Psychological problems in relation to the independence of adolescence (2)

—Peter Pan syndrome and independence of male—

永 江 誠 司

(Seiji Nagae)

(1993年8月23日受理)

The purposes of this study were to make the Peter Pan syndrome scale and to investigate the relationship between Peter Pan syndrome and sex role concepts in male university students. The following results were found. The male students made a clear distinction between the male role and the female one. The evaluation of the masculinity in male students was higher than that of the femininity. Subjects higher in Peter Pan syndrome scale did not make a clear distinction between the masculinity and the femininity, although subjects lower in Peter Pan syndrome scale made a clear distinction between them. These results indicated that the male students higher in Peter Pan syndrome scale had more undifferentiated sex role concepts.

現代の中学生と高校生が「自立」について、どのような考えをもっているかを、NHKの世論調査(1991)の結果からみると次のようになる。「早く大人になりたいか」という質問に対し、「そうは思わない」と答えた中学生・高校生は55%で、これは「そう思う」と答えた36%を大きく上回っている。大人になりたくない理由としては、「子どもでいるほうが楽だから(18%)」や「大人になることがなんとなく不安だから(13%)」などが多く、回りから保護されたままの状態でありたいというモラトリアムの傾向がはっきり表われている。また、「親離れ」についても、「していない」という答えが57%、「している」という答えが28%となっており、中学生・高校生の自立感が低いことを示している。このように、大人としての責任をもとうとしない、子どものように保護を受けていたいとする傾向が中学生・高校生の段階で強くみられ、自立への欲求の弱まっていることが指摘されている。こうした成熟拒否の傾向は、今日、思春期だけに限らず、大学生を含んだ青年期全体をとおしてみられるというのが一般的な見解となっている。

永江(1992)は、現代女性の自立と成熟の問題をシンデレラ・コンプレックスの視点から考察し

たが、本論では現代男性の自立と成熟の問題をピーター・パン・シンドローム(Peter Pan Syndrome: PPS)の視点から考察してみたい。ピーター・パン・シンドロームとは、大人社会に仲間入りしようとしなない、いわゆる「おとな・こども(man-child)」と称される、成熟を拒否する男性の示す心の症候群のことをいう。米国の心理学者であるKiley(1983)が、その著書「ピーター・パン・シンドローム—なぜ彼らは大人になれないのか」で提示した概念である。これは英国の作家J.M.バリによる物語「ピーター・パン」の中で、大人社会の仲間入りを断って夢の国「ネバー・ネバー・ランド(ないない島)」で暮らした永遠の少年、ピーター・パンにちなんで名付けられたものである。

いつまでも大人になりきれず、社会的適応のできないピーター・パン人間は、自己中心的で無責任、自尊心は強いが自分に自信がなく、さらに性的な劣等コンプレックスをもっており、信頼できる友人のいない、そういう男性として描き出されている。Kiley(1983)の説明するピーター・パン・シンドロームは、心理学的にみると無責任、不安、孤独、性役割の葛藤の基本症状と、ナルシズム(自己愛)、ショービニズム(男尊女卑)

から成る成熟拒否症候群ということになる。さらに、このシンドロームには発達の視点が導入されており、思春期から青年後期にかけて先の6つの症状が漸次的に出現してくると仮定されている。したがって、ピーター・パン・シンドロームは、この時期における人格発達の病理的展開を示すものともいえる。

ピーター・パン・シンドロームのルーツは幼児期的人格構造の歪みにまで遡ることができるが、実際にその症状があらわれるのは12歳頃からだとされている。まず、12歳から18歳までの発達過程で、無責任、不安、孤独、性役割の葛藤の4つの基本症状があらわれてくる。すなわち、親の権威が低下して家庭の秩序がなくなり、さらに子どものしつけに罰や制限をなくした、いわゆる「許容の精神」から、整理整頓のできない、礼儀をわきまえない、約束を守らないなどの「無責任」な態度が助長される。また両親の不和から、いつもビクビクして回りに気を遣う、心のよりどころのない「不安感」が増大される。さらに、豊かな消費社会の中で人間的なつながりが弱くなっていることから、同性のよい友人や仲間をもてない「孤独感」が強められる。

ウーマン・リブ運動によって伝統的な男女の価値観の変動がおこり、これまで男らしいといわれてきた傾向、例えば忍耐力、自己主張、経済的自立などを、女性が自分のものにすることができるようになってきた。それらは今や、社会的にも法律的にも公認されるようになった。すなわち、現代女性は自立した社会人、よき妻、よき母としての役割をこなすことのできる新しいシナリオを手に入れたのである。しかし、男性の方は伝統的な女性の領域に侵入していきけるようなシナリオを何一つ手に入れていない。彼らが社会に認められるためには、強くて、知性的で、頼りがいのある、女性に対しては優位に立つ男にならなければならない。決して弱みをみせたり、感情を露にしたり、依存的であってはならない。しかし、彼らがこうした伝統的な男性観にしたがって行動しようとするれば、新しいシナリオをもった女性からは拒絶されてしまうはずである。その上、男性としての新しいシナリオももっていないので、「性役割の葛藤」がさらに増幅されることになる。この性役割の葛藤が決定的なものになると、ピーター・パン・シンドロームは本格的な段階に入っていくと Kiley (1983) は指摘している。

これらは、アメリカ社会における性役割観を前提とした見解であるが、性役割を性への社会的役

割期待と定義すれば(柏木, 1973), この見解は日本社会における性役割観を前提にして再考してみなければならない。日本の性役割研究においても柏木(1972)などにより、女性が伝統的な女性役割特性ではなく男性役割特性を高く評価する傾向のあること、社会が求める性役割と自らが望む性役割とのズレは男性で小さく女性で大きいことなどが指摘されている。こうした性役割観は、日米で大きな隔たりはないといえる。ただ、総務庁青少年対策本部(1989)がまとめた「世界青年意識調査(第4回)」をみると、日米の青年の性役割観が同じ性質のものではないことを示唆しているように思われる。「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」という意見に対するアメリカ青年の答えは、「賛成する」が18.5%、「反対する」が80.8%、無回答が0.8%であった。これに対して、日本の青年は「賛成する」が30.6%、「反対する」が43.7%、無回答が25.7%であった。性別では「賛成する」は男性に多く、「反対する」は女性に多かった。この伝統的性役割観に立つ意見に「反対する」としたのは、スウェーデンの90.6%を最高に多くの国で70~80%あったのに対し、日本は11か国中最低の43.7%であった。したがって、日本の青年の性役割観は方向としては現代的性役割観に移行しつつも、比較文化的にみるとまだまだ伝統的性役割観も根強く残っているとみることができる。また日本の青年の場合、無回答が25.7%と他の国と比較しても圧倒的に多く、これが一つの特徴にもなっている。つまり、男女の役割をはっきり区別する伝統的性役割観に対して明確な態度をとれない青年が非常に多いのである。こうした結果からみると日本青年の場合、伝統的性役割観と現代的性役割観の間で性役割の葛藤を起しやすいう条件にあるといえるだろう。

ピーター・パン・シンドロームの4つの基本症状がそろってしまうと、現実に対して自信がなく、いつも不安で、どのような集団にも属せない男性、しかも男としての自分に自信がもてないといった男性ができることになる。その結果、同年齢の仲間や異性と現実的な関係を作りあげたり、経済的あるいは職業的な自立の準備を進めたりといった青年期の発達課題(Havighurst, 1953)を達成することから未熟な自己を防衛するために、18歳から22歳の頃に2つの態度を形成することになる。それがナルシズムとショービニズムである。ナルシズムとは、現実に対して責任のもてない孤独で不安な自己像を覆い隠し、理想的な自己像を幻想の中に作り出して、それにしがみつき現実

から逃避しようとする心理である。こうしたナルシズムは、自らを幻想の中に閉じこめて他人との有意義な交際を禁じてしまうように働く。ショービニズムとは、女性に対して自分の優位性を誇示したり、また女性を蔑視する態度をとることをいう。性役割の葛藤をもつことを隠そうとして必要以上に男らしく振舞ったりする。そして、20代になり社会人としての自己が問われる段階になって、自分の未熟さや適応性のなさから無気力状態になり、社会的不能症に陥ったり、あるいは自分らしさを失い社会に過剰同調するワーカホリックになってしまったりするのである。

Kiley (1983) のピーター・パン・シンドロームについての分析は、理論的にも緻密さに欠け、問題点も多いと指摘されている。例えば、ナルシズムという人格傾向が4つの基本症状から導き出されるとされているが、その因果関係についての説明は明確ではない。また、ピーター・パン・シンドロームという概念そのものが、必ずしも独創的なものではないという批判もある(木村, 1988; 木村・木村, 1984)。例えば、Erikson (1959) の「自我同一性拡散症候群」や小此木 (1978) の「モラトリアム人間」などは、名称こそ違ってもこの概念の本質を先取りしたものであるといえる。この点について小此木 (1985) は、モラトリアム人間論とピーター・パン・シンドロームとの関係についてふれ、両概念の類似性を指摘しつつも、その違いについて次のように述べている。モラトリアム人間論は、いわゆる大衆社会論であり、むしろ社会・国家や集団・組織とのかかわりを主題としている。それに対してピーター・パン・シンドロームは、個々の男の子たち、あるいは若者たちの個人的な精神発達と家庭環境とのかかわりをテーマにしている。この点で異なっているというのである。さらに、Kiley (1983) はピーター・パン・シンドロームからいかに抜け出すことができるかについて、心理学的な方法を具体的に示しており、この点で従来の成熟拒否症候群とは異なるユニークな内容になっていると評価している。

ピーター・パン・シンドロームに関する評論はわが国にもいくつかあるが(深津, 1988; 木村, 1986; 木村・木村, 1984; 小此木, 1985)、実証的研究はほとんどみあたらない。Kiley (1983) には、「ピーター・パン人間判定テスト」が示しており、20項目の質問からピーター・パン・シンドローム強度を測るようになっている。しかし、これらの項目は尺度構成の所定の手続きをとおして

作成されたものではなく、科学研究に耐えうるものとはいいがたい。したがって、ピーター・パン・シンドロームの実証的研究を遂行するには、まず信頼できる尺度を作成することが必要である。そこで、本研究の第一の目的はより信頼性のあるピーター・パン・シンドローム測定尺度を作成することにある。さらに、この尺度と独立意識との関係から妥当性についても検討する。

本研究の第二の目的は、永江 (1992) のシンデレラ・コンプレックス研究との関係から、ピーター・パン・シンドローム強度と性役割認知との関係を明らかにするところにある。ピーター・パン・シンドロームは、本質的に性役割の葛藤を内在しており、それがこの症候群を決定的なものにすると指摘されている。したがって、ピーター・パン・シンドローム強度の強い男性ほど、男性性、女性性の性役割認知が不明瞭であり、性役割同一性の拡散がみられるのではないかと考えられる。一方、ピーター・パン・シンドローム強度の弱い男性は、伝統的性役割観に立って男性性と女性性を明確に区分し、高い水準の性役割同一性を示すのではないかと考えられる。

方 法

PPS 測定尺度作成のための予備調査

被験者 調査の対象となる被験者は、福岡教育大学に在籍している173名の男子学生であった。このうち、調査内容に記入漏れのあった24名を分析の対象から除外したため、実際の被験者は149名となった。

調査の内容 調査は質問紙法によった。質問紙の内容は、Kiley (1983) がPPSの症状としてあげた、無責任、不安、孤独感、性役割の葛藤、ナルシズム、ショービニズムの6カテゴリーの特性を表す項目からなっていた。1カテゴリー12項目で全72項目が用意された。これらの項目はランダムに配列され、それぞれに「非常にそう思う」、「かなりそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「ややそう思わない」、「かなりそう思わない」、「非常にそう思わない」の7段階尺度で評定された。PPSを強く方向づけている評定に対しては7点、逆の方向づけに対しては1点が与えられた。

調査の手続き 調査は、調査者が被験者に直接内容を説明し、回収する方法がとられた。教示は次のように行われた。「この調査は、男性の独立と依存に関して答えてもらうものです。それぞれ

Table 1 ピーター・パン・シンドローム測定尺度

無責任	性役割の葛藤
1. しなければならないことを先に延ばし、結局なげだしてしまうことが多い	25. 女性は本質的に強くないから守ってあげたいが、それを行動にうつせない
2. 日常的なちょっとした身の振る舞いもきちんとできない	26. 近頃の女性にはかなわないと思う
3. わがままなほうである	27. 女性と自信をもって付き合えない
4. あまり清潔なほうではない	28. 自分の性格の中に女性的な面を感じる
5. 叱られるとすぐ口答えする	29. 女性が怖いのには性的欲求を感じて困る
6. 失敗を人のせいにしがちである	30. 女性の前では敬意を払うが、いなくなると軽蔑した態度をとる
7. 自分は人から信頼されていない	31. どのような男性が理想なのかわからない
8. 友人から無責任といわれることがある	32. 弱い人間だと思われたくないので、いつも強気で突っ張った態度をとる
不安	ナルシシズム
9. よくわけのわからない不安におびえたり、自信がなくなったりする	33. 自分を完全にみせようとする
10. よく自分を責めたりする	34. 自分のことを皆が認め、称賛してくれる空想にふけることが多い
11. 自分の感情を表現するのが難しい	35. 自分のことをたな上げにして、人のことを感情的だと非難する
12. 集中力がない	36. 自分と違う意見には耳を貸そうとしない
13. 権威をもつ男性とうまく付き合えない	37. 自分の勉強(仕事)がうまくいかないのは、先生(上司)が悪いからだ
14. 父親から決して認めてもらえないとあきらめている	38. 普段と違う自分に浸るのが好きだ
15. 家庭に心の安定がない	39. 行動が衝動的で極端な言動をすることがある
16. 両親の仲があまりよくない	40. 現実のめんどろなことにほかかわりをもちたくない
孤独	ショービニズム
17. いつも人に対しては陽気に振る舞っているが、内心はひどく孤独だ	41. 女性は男性に従うべきだと思う
18. 人がいないと淋しいので、いつも誰かと一緒にいたい	42. 仕事や勉強で女性に負けるのは恥だと思う
19. 人付き合いは広いほうだが、心を打ち明けられる友達がいない	43. 男尊女卑的な発言をする
20. 同じ世代の同性の仲間とうまく溶け込めない	44. 女性とうまく付き合えないのは、相手が悪いからだ
21. 気を紛らせてくれそうなものに次々手をだす	45. 自分がセックスしたいと思うときは、相手の女性もそうだと思ってしまう
22. 愛情はカネで買えると思う	46. すぐ女性を好きになるが、親密な関係になると一緒にいるのもいやになる
23. 家族の一員であるという気持ちがもてない	47. 女性のことを話題にすると、男同士で連帯が強まるような気がする
24. 自分の家族は周囲から孤立している	48. 男友達の間でだけ下品なことを言って喜ぶ

の項目を現実の自分に照らし合わせて評定して下さい。』

調査の時期 調査は、1991年12月下旬に実施された。

調査の結果 本調査の対象となった男子学生149名をそのPPS得点によって、上位および下位それぞれ38名(全被験者の25.5%)で分けた2群について、各項目ごとに平均値の差を検定して、尺度としての弁別力をみるGP分析を行った。その結果、両群に5%水準で有意差のみられたのが59項目、有意差のみられなかった項目が13項目あった。そこで、有意差のみられた59項目の中からPPS尺度の6カテゴリーとしてより適切と思

われる48項目(各々カテゴリーごと8項目)を選択した(Table 1)。

本調査

被験者 調査の対象となる被験者は、福岡教育大学に在籍している165名の男子学生であった。このうち、調査内容に記入漏れのあった24名を分析の対象から除外したため、実際の被験者は141名となった。

調査の内容 調査は質問紙法によった。質問紙は、PPS測定尺度、独立意識測定尺度、性役割認知測定尺度からなっている。以下、これらの尺度の内容について説明する。

(a) PPS 測定尺度：予備調査によって作成された尺度項目が使用された。その内訳は、「無責任」、「不安」、「孤独」、「性役割の葛藤」、「ナルシズム」、「ショービニズム」がそれぞれ8項目の全48項目であった (Table 1)。これらの項目はランダムな順序に配列され、それぞれ「非常にそう思う」から「非常にそう思わない」までの7段階尺度で評定された。PPS を強く方向づけている評定に対しては7点、逆の方向づけに対しては1点が与えられた。したがって、個人の尺度得点の分布は336点から48点にわたっている。

(b) 独立意識測定尺度：加藤・高木 (1980) が作成した独立意識測定尺度の20項目を採用した。尺度の内訳は、「自己の独立性」10項目、「親への依存性」5項目、「反抗・内的混乱」5項目からなっている (Table 2)。これらの項目は、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「ややあてはまらない」、「非常にあてはまらない」の5段階尺度で評定された。それぞれの特性を強く方向づけている評定に対して5点、逆の方向づけに対しては1点が与えられた。

(c) 性役割認知測定尺度：伊藤 (1978) が作成した性役割認知測定尺度の30項目を採用した。尺度の内訳は、「男性性」、「女性性」、「人間性」がそれぞれ10項目ずつとなっている (Table 3)。これらの項目はランダムな順序で配列され、それぞれ「非常にあてはまる」、「かなりあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「ややあてはまらない」、「かなりあてはまらない」、「非常にあてはまらない」の7段階尺度で評定された。それぞれの性役割特性の認知を強く方向づけている評定に対しては7点、逆の方向づけに対しては1点が与えられた。したがって、個人の尺

Table 2 独立意識測定尺度

自己の独立性	
1.	自分の人生を自分で築いていく自信がある
2.	自分自身の判断に責任をもって行動することができる
3.	生きることの意味や価値を自分で見出すことができる
4.	生活の中に自分の個性を生かそうと努めている
5.	まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる
6.	社会の中で自分の果たすべき役割があると思う
7.	自分の考えが変わりやすく自信がもてない
8.	自分のほんとうにやりたいことが何なのかわからない
9.	たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひげめを感じることはない
10.	小さなことでも、自分で決断することができる
親への依存性	
11.	親といっただけで何となく安心できる
12.	困ったときは親に頼りたくなる
13.	親は自分の心の支えである
14.	何かする時には、親にはげましてもらいたい
15.	自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている
反抗・内的混乱	
16.	両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い
17.	親や先生の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる
18.	大人に対してひげめを感じる人が多い
19.	両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない
20.	親に対して自分の意見を主張したいが、自信がもてない

Table 3 性役割認知測定尺度

男性性	女性性	人間性
1. 冒険心に富んだ	11. かわいい	21. 忍耐強い
2. たくましい	12. 優雅な	22. 心の広い
3. 大胆な	13. 色気のある	23. 頭の良い
4. 指導力のある	14. 献身的な	24. 明るい
5. 信念を持った	15. 愛嬌のある	25. 暖かい
6. 頼りがいのある	16. 言葉使いの丁寧な	26. 誠実な
7. 行動力のある	17. 繊細な	27. 健康な
8. 自己主張のできる	18. 従順な	28. 率直な
9. 意志の強い	19. 静かな	29. 自分の生き方のある
10. 決断力のある	20. おしゃれな	30. 視野の広い

度得点の分布は3つの特性ごとに70点から10点にわたっている。性役割認知測定尺度では、(ア) 現実自己, (イ) 理想自己, (ウ) 社会一般の3つの視点から, それぞれ評定することが求められた。

調査の手続き 調査は, 調査者が被験者に直接内容を説明し, 回収する方法をとった。教示は次のように行われた。「質問紙は3種類あります。第1の質問紙は, 男性の自立と依存に関して答えてもらうものです。それぞれの項目を現実の自分に照らし合わせて評定して下さい。第2の質問紙は, あなた自信の独立意識についてお聞きするものです。それぞれの項目がどれだけ自分にあてはまるかを考えて評定して下さい。第3の質問紙は, 性役割すなわち男らしさ, 女らしさについてあなたの考えをお聞きするものです。それぞれの項目が, (ア) 現実の自己にどれだけあてはまると思うか, (イ) 理想的な自己にどれだけあてはまると思うか, (ウ) 社会一般では男性に対してどれだけあてはまるとされているかと思うかを判断して評定して下さい。」

調査の時期 調査は, 1992年1月下旬に実施された。

結 果

PPS 測定尺度の分析

被験者141名が, 48項目の PPS 測定尺度に対して行った評定の平均値は159.35 (SD=29.68)であった。この平均値から1SD以上得点の高い被験者(189点以上)を PPS 上位群, 1SD以上得点の低い被験者(129点以下)を PPS 下位群, PPS 上位群と PPS 下位群の中間得点の被験者(149点以上164点以下)を PPS 中位群として抽出した。3つの群の被験者数は, それぞれ25名ずつとした。これらの被験者の PPS の6つの下位尺度ごとの得点は, Table 4 に示したとおりである。

Table 4 の資料に対して, PPS 強度×PPS 下位

Table 4 ピーター・パン・シンドローム強度別の下位カテゴリー得点

下位カテゴリー	PPS 上位群	PPS 中位群	PPS 下位群
無責任	36.16	27.28	20.04
不安	34.20	25.44	19.40
孤独	31.04	23.32	16.36
性役割の葛藤	35.08	27.92	20.20
ナルシズム	35.36	28.32	20.68
ショービニズム	31.60	25.68	19.00

尺度の2要因の分散分析を行った結果は次のとおりである。主効果として, PPS 強度に有意差がみられた ($F_{(2,72)}=396.70, p<.01$)。Tukey 法による多重比較の結果, PPS 上位群, PPS 中位群, PPS 下位群の順に得点が高く, すべての群間に有意差がみられた。PPS 下位尺度に有意差がみられた ($F_{(5,360)}=11.66, p<.01$)。しかし, PPS 強度×PPS 下位尺度の交互作用は有意でなかった。

PPS 強度と独立意識

PPS 上位群, PPS 中位群, PPS 下位群別に独立意識測定尺度の結果を示したものが Table 5 である。この資料に対して, 独立意識測定尺度の3つの下位カテゴリー別に, それぞれ1要因の分散分析を行った結果は次のとおりである。まず, 自己の独立性得点については PPS 強度間に有意差がみられた ($F_{(2,72)}=21.97, p<.01$)。PPS 下位群, PPS 中位群, PPS 上位群の順に得点が高く, かつ3群間にはすべて有意差がみられた。次に, 親への依存性についても有意差がみられ ($F_{(2,72)}=3.34, p<.05$)。依存性の最も低い PPS 下位群と PPS 中位群, PPS 上位群との間に有意差がみられた。さらに, 反抗・内的混乱についても有意差がみられた ($F_{(2,72)}=17.33, p<0.1$)。反抗・内的混乱の最も低い PPS 下位群と PPS 上位群の間に有意差がみられたが, PPS 中位群との間には有意差がみられなかった。PPS 中位群と PPS 上位群の間には有意差がみられた。

PPS 強度と性役割認知

PPS 上位群, PPS 中位群, PPS 下位群別に, 性役割認知測定尺度の結果を示したものが Table 6 である。この資料に対して, PPS 強度×性役割評価×性役割特性の3要因の分散分析を行った結果は次のとおりである。主効果として, PPS 強度について有意差がみられた ($F_{(2,72)}=4.43, p<.05$)。多重比較の結果, PPS 下位群, PPS 中位群, PPS 上位群の順に性役割認知得点が高かったが, 有意差のみられたのは PPS 下位群と PPS

Table 5 ピーター・パン・シンドローム強度別の独立意識得点

独立意識	PPS 上位群	PPS 中位群	PPS 下位群
自己の独立性	30.68	36.36	40.68
親への依存性	15.64	16.28	13.64
反抗・内的混乱	14.48	11.04	9.84

Table 6 ビーター・パン・シンドローム強度・性役割評価・性役割特性別の性役割認知得点

	現実自己			理想自己			社会一般		
	男性性	女性性	人間性	男性性	女性性	人間性	男性性	女性性	人間性
PPS 上位群	37.04	38.92	42.12	59.92	49.32	60.92	44.36	41.84	45.88
PPS 中位群	44.52	38.76	47.56	60.00	47.48	60.28	45.84	41.88	47.64
PPS 下位群	47.88	40.56	52.04	60.64	48.28	62.60	48.12	44.52	52.84

上位群間のみであった。性役割評価についても有意差がみられた ($F_{(2,144)}=139.94, p<.01$)。多重比較の結果、理想自己、社会一般、現実自己の順に得点が高く、かつこれら3群間にはすべて有意差がみられた。性役割特性も有意差がみられた ($F_{(2,144)}=111.39, p<.01$)。人間性、男性性、女性性の順に得点が高く、3群間にもすべて有意差がみられた。

交互作用については、PPS 強度×性役割評価が有意であった ($F_{(4,144)}=3.16, p<.05$)。これは、現実自己では PPS 下位群、PPS 中位群、PPS 上位群の順に得点が高く、3群間にも全て有意差がみられ、また社会一般では PPS 下位群と PPS 上位群、PPS 下位群と PPS 中位群の間に有意差がみられたのに対し、理想自己では3群間に有意差がみられなかったことによる。次に、PPS 強度×性役割特性が有意であった ($F_{(4,144)}=3.64, p<.01$)。これは、男性性、人間性ともに PPS 下位群、PPS 中位群、PPS 上位群の順に得点が高く、3群間にもすべて有意差がみられたのに対し、女性性では3群間に有意差がみられなかったことによる。さらに、性役割評価×性役割特性が有意であった ($F_{(4,288)}=22.98, p<.01$)。これは、現実自己と理想自己ともに男性性と人間性が女性性より有意に得点が高かったのに対し、社会一般では特に男性性と女性性の間に有意差がみられなかったことによる。

最後に、PPS 強度×性役割評価×性役割特性は有意ではなかったが、その傾向がみられた ($F_{(8,288)}=1.83, .05<p<.10$)。この結果を図示したものが Figure 1 である。ここで注目されるのは、3つの PPS 群における現実自己に関する結果の違いである。Figure 1 によると、PPS 上位群では現実自己の3つの性役割特性間に有意差がみられないだけでなく、男性性が女性性よりも低く評価されている。しかし、PPS 下位群と PPS 中位群では性役割特性に有意差がみられ、男性性と人間性が女性性より高く評価されている。

考 察

本研究の主要な結果は、次のとおりである。
 (1)男子青年の性役割認知において、現実自己と理想自己の評定では、ともに男性性が女性性より高く評価されていた。社会一般でも同じ方向で評価されていたが、この2つの性役割特性間の差はなかった。
 (2)PPS 強度は、独立意識の強さに対応していた。
 (3)PPS 強度の違いによって、性役割認知が異なっていた。それは、現実自己認知において特に顕著に現われていた。PPS 上位群は、自らの男性性を女性性よりやや低く評価しているのに対し、PPS 下位群は男性性を女性性より明らかに高く評価していた。PPS 中位群もこれに準ずる傾向を示していた。

(1)の結果は、男子青年の性役割認知が人間性を中心に男性性を高く評価する傾向にあることを示している。相対的に女性性の評価は低かった。このことは、現実自己に対する性役割評価に特に明瞭に現われている。彼らは、「暖かい」、「誠実な」、「視野の広い」などの人間性特性を自らの性役割の中心におき、「たくましい」、「自己主張のできる」、「決断力のある」などの男性特性を、「献身的な」、「愛嬌のある」、「繊細な」などの女性特性より高く評価して、自分の性役割特性として実現していると認知している。そして、自らの理想自己はこれらの特徴をより強めたものとして認知されている。ただ、基本的には同じ傾向を示しながら、社会一般としての認知は男性性と女性性の評価の差がなくなっている。現実社会の男性役割期待がどうであるかは別に、男子青年の認知には、男性に男性特性とともに女性特性がある程度期待されているという認知を示している。

以上の結果を、永江 (1992) の女子青年の性役割認知の結果と比較してみたい。女子青年の性役割認知は、現実自己と理想自己ではともに男性性を女性性より高く評価していた。また、社会一般としての認知は、女性には女性性が高く期待され

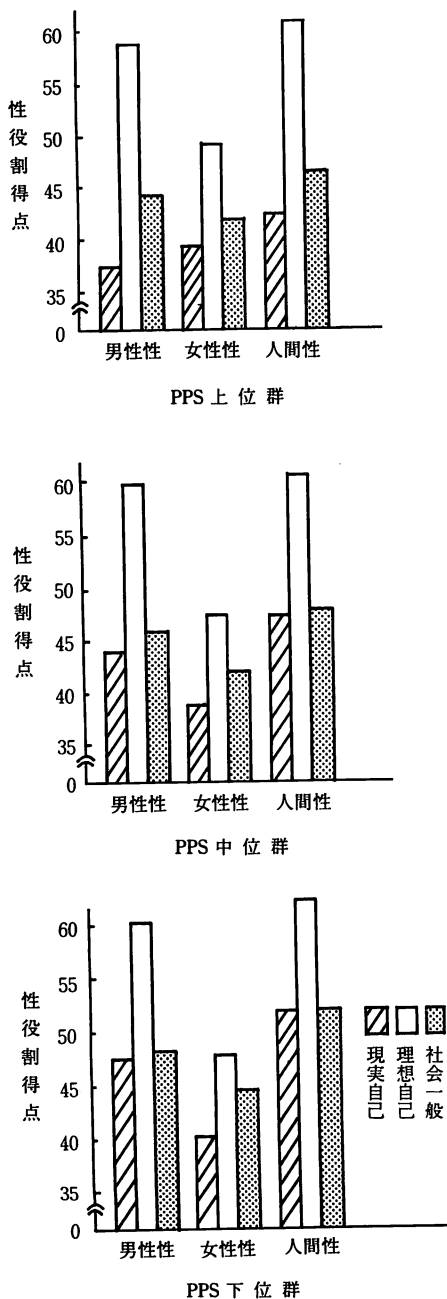


Figure 1 ピーター・パン・シンドローム強度・性役割評価・性役割特性別の平均性役割認知得点

ているだろうというものであった。したがって、男子青年と女子青年の現実自己と理想自己についての性役割認知は、その特性が接近しているといえるだろう。女子青年の性役割認知は、いわゆる男性役割と女性役割の違いを最小限にしか認めない現代的性役割観に立っており、それが男子青年の性役割認知に接近する原因となっている。現代社会において女性が自立していくためには、女性性よりは男性性を自らの役割特性として身につけなければならないという意識が、女性の心理に強く働いていることが指摘できる。男子青年の場合は、現代社会に適応していくためには社会が期待する伝統的男性役割を習得していけばいわけで、本来の性役割との矛盾はないといえる。ただ、女子青年の場合は、自らの性役割獲得と社会の女性に求める役割期待が矛盾することが多いために、性役割同一性の確立は男子以上に困難であるといえるだろう。

(2)の結果は、PPS 強度が独立意識と密接な関係をもっていることを明確に示している。PPS 上位群は、「自己の独立性」が低く、「親への依存性」は高く、さらに「反抗や内的混乱」は大きいという独立意識の特徴を示している。これは、PPS 下位群とはまったく逆の特徴となっている。これらのことは、PPS 強度の強い男性は独立意識の弱いことを示しており、PPS 測定尺度が「男子青年の自立と依存」を測定する尺度として妥当性をもつものであることを示唆している。

(3)の結果は、以上の考察をピーター・パン・シンドロームの観点からさらに深めることを可能にするものであり、本研究の独自性もここにあるといえる。すでに見てきたように、男子青年は自らの性役割特性として、人間性を中心に男性性を高く評価する態度をもっていた。このことを PPS 強度別にみても、その特徴がかなり異なっているのがわかる (Figure 1)。まず、PPS 強度の最も弱い PPS 下位群の性役割認知をみると、性役割評価×性役割特性の交互作用の特徴をさらに強化したものになっていることがわかる。PPS 下位群は、現実自己、理想自己、そして社会一般において男性性を女性性より有意に高く評価しており、自らの役割として明確な男性役割認知をもっているといえる。また、男性性の評価は現実自己と社会一般の間で有意差はなく、自己の男性役割が社会一般の期待するそれにほぼ見合うものであるという評価をしている。このように、PPS 強度の弱い男性の性役割認知は、男性役割と女性役割を区別する伝統的性役割観に立つものとして

特徴づけることができるだろう。ちなみに、PPS強度が中間にある PPS 中位群の性役割認知をみると、基本的には PPS 下位群のそれに準ずる特徴を示しているといえるだろう (Figure 1)。

これに対して、PPS 強度の強い PPS 上位群の性役割認知をみると、PPS 下位群のそれとは異なる特徴を示していることがわかる。特に、現実自己における男性性、女性性、人間性の評価では、これら3群間に有意差がみられず、きわめて不明瞭な性役割認知の実態を示している。さらに、現実自己の男性性の評価は社会一般のそれより有意に低く、自己の男性役割が社会一般の期待するそれより弱く劣っているとみなしていることがわかる。これらのことから、PPS 上位群の性役割認知が、男性役割と女性役割の違いを最小限にしか認めない現代的性役割観に立つとみるのは妥当ではなかろう。むしろ、自らの性に見合った役割が獲得できていないということから、性役割同一性が拡散した状態にあるとみるのが妥当であろう。

ピーター・パン・シンドロームを形成する6つの症状の1つに「性役割の葛藤」があった。本研究の結果からみるかぎり、この葛藤は PPS 上位群の現実自己の性役割認知に関してのみあてはまるものである。理想自己と社会一般における性役割認知にはこの葛藤はみられない。このことは見方を変えれば、PPS 上位群の場合は自らの男性性に関して現実自己と理想自己、あるいは現実自己と社会一般との間により大きなズレのあることを示している。この意味で PPS 強度の強い男性は、現実自己と理想自己、現実自己と社会一般と

の間に男性役割に関してより葛藤した認知をもっているといえるだろう。

以上の結果をシンデレラ・コンプレックス強度と性役割認知との関係をみた永江 (1992) の結果と比較してみたい。シンデレラ・コンプレックス強度の強い女性の性役割認知は、現実自己、理想自己、社会一般ともに、女性性と男性性の評価に有意差がみられなかった。したがって、このタイプの女性にも強い性役割の葛藤が内在していることが示されていた。これに対して、シンデレラ・コンプレックス強度の弱い女性では、現実自己、理想自己ともに女性性より男性性を有意に高く評価しており、非常に明瞭な現代的性役割観をもっていることが示されていた。これらのことから、ピーター・パン・シンドローム強度とシンデレラ・コンプレックス強度によって分類された3つのグループは、性役割認知に関してそれぞれ関連性をもった結果を示しているといえる。自立性の高い青年は、男女ともに男性性について高い評価を示しており、男性の場合は伝統的性役割観を、女性の場合は現代的性役割観をそれぞれ明確にもっていることが明らかにされた。彼らの性役割同一性は高く安定したものであった。一方、自立性の低い青年は、男女ともに現実自己認知を中心に、男性性と女性性の区分が非常に不明瞭であり、彼らの性役割同一性は低く拡散したものであった。

<付記>本論文は、著者の指導の下に本学の学生古田和弘、西村 修、去川英俊、佐藤路子が収集した資料を、著者が分析して作成したものである。

引用文献

- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. Psychological Issues Monograph. Vol. 1, No. 1 International University Press.
- 深津千賀子 1988 ピーター・パン人間とウェンディ人間 現代のエスプリ, 11, 165-174.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans, Green and Co.
- 伊藤裕子・北島順子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知 II 教育心理学研究, 20, 48-58.
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割の習得 依田 新(編) 現代青年心理学講座5: 現代青年の性意識 金子書房 Pp. 99-139.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 72-76.
- Kiley, D. 1983 *The Peter Pan syndrome: Men who have never grown up*. New York: Dodd, Mead & Company.
- 小此木啓吾(訳) 1984 ピーター・パン・シンドロームなぜ、彼らは大人になれないのか 祥伝社

- 木村 駿 1986 ピーター・パン・シンドロームとシンデレラ・コンプレックス 詫摩武俊（監修）パッケージ・性格の心理4：性格の諸側面 ブレーン出版 Pp. 142-157.
- 木村治美・木村 駿 1984 ピーター・パンとシンデレラ 廣済堂出版
- 永江誠司 1992 青年期の自立にかかわる諸問題(1)—シンデレラ・コンプレックスと女性の自立 福岡教育大学紀要, 41, 第4分冊, 309-317.
- NHK 世論調査部（編）1991 現代中学生・高校生の生活と意識 明治図書
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 小此木啓吾 1985 現代青年の心の病を浮き彫りにした PPS：ピーター・パン・シンドローム 青年心理, 50, 100-106.
- 総務庁青少年対策本部（編）1989 世界の青年との比較からみた日本の青年—世界青年意識調査（第4回）報告書 大蔵省印刷局